

## 二人の 私 ・もう一つの 小民史 : 独歩文学を貫くもの(2)

著者	新保 邦寛
雑誌名	文藝言語研究. 文藝篇
巻	24
ページ	136(45)-162(19)
発行年	1993-08-31
その他のタイトル	My Two Selves : Another History of Commoners (The stream of Doppo Kunikida's Works (2))
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/13747">http://hdl.handle.net/2241/13747</a>

## 二人の〈私〉・もう一つの〈小民史〉

——独歩文学を貫くもの(2)——

新保 邦 寛

国田独歩が小説家として自らに課した〈小民史〉につき、私なりに整理を進める中で、次のような点に注意を向けておいたことがある。

すなわち、〈窮迫当時は却つて「帰去来」「小春」の如きものを制作せり〉(『病牀録』明41・7新潮社)と、晩年の独歩が顧みているように、彼の〈小民史〉が一頓挫したかにみえる明治33年後半、いわゆる〈霞ヶ丘時代〉に、要するに自己の人間的基盤を問う小説ないし小品を書き出す事実、しかも、それが一過性の事態に止まらず、以降、〈小民〉を描く小説群とは別に、一系列を紡いでいくと考えられる点について、である。

いわば、〈私〉の主題化とでも言うべき小説群であるが、従来、そのような発想自体なく、中には、独歩文学を対象化する主要な視座から外されたまま孤立しているものも少くない。それ故本稿は、その一群の小説をある体系のもとに収斂し、合わせて独歩文学に関する一つの鳥瞰図を示す試みになる筈である。

### (一)

さて、「帰去来」と「小春」についてであるが、「小春」(『中学世界』明33・12)が自己の人間的基盤を問うものであることは見易い。何しろ〈小山〉という名前で登場する画家の岡落葉が、後に「独歩の半生」(『趣味』明

41・8)で証言するように、明治33年11月頃の独歩の心境をほぼそのまま綴った、むしろ随想といった方が適切な内容だからである。

一方、明治33年8月執筆と考えられる「帰去来」(『新小説』明34・5)は少々複雑である。その題名が示す通り、「帰省小説」としての枠組みを持つことから、「河霧」(『国民之友』明31・7)などと全く同工異曲の小説と捉えられる傾向が強かった。しかし「河霧」の主人公・上田豊吉について、いくら作者との結縁を強調してみたところで、やはり豊吉は豊吉である筈だが、「帰去来」の場合、それが明治24年の山口県麻郷への帰省、石崎トミへの失恋という、独歩自身の体験によって成り立っている以上、主人公の吉岡峯雄は、明らかに作者独歩の何らかの意味での分身として造型されたと言わねばなるまい。

ならば、独歩の今を問う「小春」に対し、「帰去来」は、過去を対象化する試みなのかというと、ことはそう簡単ではない。例えば北野昭彦氏は、次のように言う。

この作品にはもう一つの意図が託されており、それは麻郷から上京した時の悲壮な決意・心境を反芻し、再吟味して、それをこれから政界に出馬しようとする執筆時の心境・決意と重ね合わせることで、運命に挑戦し、前途を開拓していこうとする志向である。

と。恋人との結婚を胸に秘め久々に帰省した主人公の故郷幻想が、一旦は、都会を捨て自由な「山林生活」を思うまで高揚し乍ら、田舎の封建性故に崩れ、さらに恋人の不慮の死によって「戦闘こそ人の運命」と悟り、都会に戻るというこの物語を、北野氏のように二重構造で捉えるのは、既に共通理解といって好い。但し、その「執筆時の心境・決意」を北野氏のように「政界出馬」に結び付けることは、今や許されない。「帰去来」の執筆が少くとも半年以上前であることはほぼ確実であり、「明治33年8月」執筆説を採る森英一氏は、それ故この小説に、「霞ヶ丘時代」の生活窮乏からの脱出を見、またやや無理があるものの、「明治30年5月」執筆説を示唆する滝藤満義氏は、佐々城信子との破婚の傷手への決別と、小説家として世に立つ決意を読む。いずれにしろ、このような読み方が生まれる理由は、何よりも「帰去来」の結びにある。すなわち、

不羈、独立、自由！人は此地上に於て其十分を享有すべき約束を持って居ない。

「戦闘！さうだ戦闘こそ人の運命だ。たゞ夫れ戦闘それ自身が人の運命だ。行かう。明日立とう、明日！」という、やや唐突な峯雄の叫びであるが、おそらくそれは、既に、「運命の神」という衣を纏って小説世界に介入し、視点人物たる峯雄の認識に対して、「甘くゆけば宜いが」(其三)、(左う都合よく行けば宜いが)(其十)と囁いていた作者独歩の声が、そういう小説的仮構をかなぐり捨てて、ほぼ肉声として噴出したものである。

この「帰去来」が執筆されたと考えられる明治33年夏頃、『抒情詩』仲間(青春の訣別)という事態が起こっていた。田山花袋の自伝小説「妻」(『日本新聞』明41・10—42・2)によれば、当時誰もがへもういつまでも美しい夢を見ては居られない」と思い、柳田国男が吟唱した「われも戦闘者たり」といふハイネの文句が実社会に打って出ようとする『抒情詩』仲間のスローガンになったと言う。つまりこのような当時の彼らの情況に、「帰去来」の内容がそのまま対応している訳で、それ故、この小説で見据えられているのは、独歩の現在の心境、つまり一見、自己の人間的基盤を問うべく過去に逆行しつつも、あくまで過去そのものではなく、執筆時の独歩の心境なのである。

要するに、「帰去来」も「小春」も同じ構造になっている。こういう自己の心境を語る小説や小品が、「霞ヶ丘時代」に書かれるのは、当然、文壇に「個我の文学」が登場する、いわゆる「ノイエ・ロマンティック」という時代風潮に促されてのことであろうが、独歩の「第二期」の創作活動の開始と共に直ちに書かれる「牛肉と馬鈴薯」に受け継がれ、既述の如く、以降一系列を紡いでいくと思われる故、重要なのである。

そこで、「牛肉と馬鈴薯」(『小天地』明34・11)であるが、「明治倶楽部」という実在のサロンを舞台に、七人の登場人物が「牛肉(実際)」か「馬鈴薯(理想)」かをめぐって議論を交す前半と、岡本誠夫が驚異願望を語る後半とで構成されるこの小説について、これまで、独歩の思想を窺う上で重要な小説と見做され、あるいは当時としては珍らしい「哲学小説」と言われてきたせいか、結局は「驚異」思想の解説こそ差当たりの課題であるかの如く考えられてきた感がある。そのため「帰去来」や「小春」との関連に於いて捉えた論は疎か、個我の文学

という観点から論じたものすら取り敢えず見当らない。しかし幸いにして、独歩が「予が作品と事実」(『文章世界』明40・7)で次のような手掛かりを残してくれている。すなわち七人の登場人物のうち、松木・竹内・井山・綿貫には、それぞれ松本君平・竹越三又・井上敬次郎・渡辺勘十郎という實在のモデルがあり、残る三人、上村・近藤・岡本は要するに独歩の分身である、と。

この独歩の発言に基いて、各登場人物の人間像を細かく整理してみせた山田博光氏の論もあるが、とどのつまり、〈権利義務で通した実際派〉の綿貫は言うまでもなく、かつては〈理想派〉であつたが今や〈実際派〉などという松木・竹内・井山、それに独歩の分身の一人・上村などは、〈俗物〉として描かれているのではなからうか。そしてそう捉えることによって、既述の「小春」との関連がはつきり見えてくる。「小春」へ一章に次のようにある。

自分の友人の中でも随分自分と同じく、自然を愛し、自然を友として高き感情の中に住でいた者もあつたが、今では立派な実家になつて、他人の噂をすれば必ず「彼奴は常識が乏しい」とか「あれは事務家だ豪い処がある」など評し、以前の話が出ると赤い顔をして、「あの時はお互に未だ若かつた」と頭を掻くではないか。と。〈自分〉は、そういう通俗性に陥る危機を回避すべく、かつて愛読したワーズワスの詩集を繙き、熱烈なワーズワシアンであつた〈佐伯時代〉の心持ちに立ち帰ろうとする訳だが、つまりこのような「小春」の構造は、「牛肉と馬鈴薯」のそれにそっくりであると言える。またそれ故、両者の差異も明瞭で、「牛肉と馬鈴薯」では、「小春」には見られなかつた〈驚異〉願望が浮上してきており、さらに自己分析が重層化している、言うまでもなく、上村・近藤・岡本という三人の独歩の分身が登場する点である。

上村については、既述の如く〈俗物〉である。独歩は、自分のそういう一面を見逃さなかつたのであろう。従つて問題は、近藤と岡本である。岡本誠夫の方は見易い。すっかり世間擦れしてしまつている他の人物に対して、〈驚異〉を梃子にあくまで世俗化を逃れようとする岡本の姿は、ある意味で理想主義者と見做して差し支えない。だが、近藤はどうであらう。彼の経歴や心理は全くといって好い程描かれないが、山田博光前掲論文も言うよう

に、岡本とは正反對の實際家に思える。しかしそれは、他の登場人物と同じ「俗物」ということではない。近藤は、俗物とはむしろ対峙しており、それは、彼らの理窟を「詩人の墮落」と喝破する点や、さらには結末で、岡本を全く理解しない他の人物を尻目に、彼のみ「岡本の顔に言う可からざる苦痛の色を見て取った」ことによつても窺える筈である。つまり岡本と近藤の間に横たわっているのは、「理想派」と「實際派」の対立などではなく、却つて共通する何かがあつた。とすれば二人の相違は、もつと別の点になければならない。

主として近代日本の文学者について、かつて伊藤整は、「実践的求道者」と「人間性認識者」の二つのタイプに分けることを提唱したことがある。人はいかに生くべきか」という命題のもと「外部にある敵、外部にある古き秩序と戦うタイプ」と、人はいかに生きているか」という命題のもと「心内の敵」と戦うタイプであるが、つまりこの伊藤整の言う「求道者」と「認識者」の範疇に、岡本と近藤の人間像がほぼ収まるのではなからうか。しかも言うまでもないが、この二つのタイプは、一人の人間の中に共存していることもあり得る訳で、おそらく独歩も、自己の二つの傾向として見据えていたと考えられる。既に「帰去来」と「小春」に描かれた二つの自画像の相違を視野に置けば、その点より確かなものに見える筈である。共に独歩の分身であり乍ら、田舎の封建的人間性の前に夢破れ、「戦闘」を期して帰京する「帰去来」の吉岡峯雄が「求道者」であるなら、自己の世俗化への傾斜と戦いつつ、「自分が佐伯に居た時分と同年輩」の画家・小山に、結末で、

君が春なら僕は小春サ、小春サ、いまに冬が来るだろうよ！

と言つてみせる「小春」の「自分」は、「認識者」であらう。要するに、「帰去来」と「小春」のそれぞれに開示された独歩の一面が、「牛肉と馬鈴薯」では、相対化されているということではなからうか。そうすると、そのプロセスで、既述のように「驚異」という発想が浮上してきたことになるが。

ところが、この「驚異」思想は、実は、独歩の生涯を貫く基本思想の一つであり、その全貌は早くも「驚異」(「独歩吟」『抒情詩』明30・4民友社)と題する詩に現われてくる。しかもその後の独歩の創作活動に於いて度々顔を出すため、次のような理解が行き渡っている。

独歩の文学は通例三期に分けて論じられるが、それは彼自身の執筆時期が三期に分断されているせいでもある。分断したのは彼の熱烈な社会活動である。(略)そして注意すべきは、彼が社会活動から文学に舞い戻る時、必ず「驚異」をテーマにした作品を以て突破口を開いていることである。則ち、前期については既にみたとおりとして(例えば詩「驚異」、中期の場合が外ならぬ「牛肉と馬鈴薯」、後期が「岡本の手帳」である。

確かに、一見合理的な説明に思える、しかしほとんど独歩の肉声そのもののような青年時代の詩の類いと、例え独歩自身がいかに色濃く投影しようとして、やはりフィクションとして書かれたものを同一の位相で捉えることに些か躊躇いを覚える。事実、後者のみ切り離してみれば、全く異なった系列を見出すことができる。すなわち「牛肉と馬鈴薯」と「岡本の手帳」と、さらにその間に「画の悲み」を据え置くことでより鮮明に見えてくる、独歩の分身的人物「岡本誠夫」を主題化する、いわば「岡本もの」とも言うべき流れである。しかもこのような想定が決して牽強付会ではないことは、それが、石川啄木の『時代閉塞の現状』(明43・8)に於ける次のような指摘、日清戦後に始まる青年たちの自己主張が、先ず「高山樗牛の『個人主義』で(第一声)を見、次に「綱島梁川の『宗教的実験』」を経て、やがて自然主義に到ったとするそれに、見事に対応する流れであることによっても窺える筈である。詳しくは後述するとして、やはり「牛肉と馬鈴薯」に於ける「驚異」思想は、岡本誠夫の輪廓が明瞭になっていく中で、改めて独歩の眼に映ってきたものと考えた方が好きそうである。

## (二)

さて、その「岡本もの」の系譜であるが、実は、「岡本の手帳」(『中央公論』明39・6)が一番早く書かれたとする説がある。滝藤満義氏は、『欺かざるの記』(明29・8・17)の条に、「わが願ふ所」を草しつつあり」とあるのがそれであると推定する。つまりこの『わが願ふ所』と題された青年期の随想を、十年後に、「岡本の手帳」の名のもと、次のようなコメントを冒頭に付して発表したという次第である。

左は『牛肉と馬鈴薯』の主人公、岡本誠夫の手帳より抜き書きせしものなり、この主人公に同情ある人には

多少の興味あるべし。

単に青年独歩の心境を吐露したにすぎない『わが願ふ所』を、殊更「岡本もの」に読み替えてみせる必要とは何であつたか、ということだが、創作活動の「突破口を開く」ためとする滝藤説では、「岡本もの」への仮構の意味に届くまい。結論的に言えば、この「岡本の手帳」が発表される明治30年代後半は、一種の「精神運動昂揚期」であつたが、その主役を演じた一人である綱島梁川の思想に促されてのことであつた。

梁川が時代のメルクマールになるのは、明治38年7月「新人」に発表した「予が見神の実験」によつてである。信仰の合理性を求め続けた梁川がついに神と冥合する霊的経験を得たというこの報告に、当時の思想界は一大衝激を受けた。大方否定的評価に赴いた中で、独歩は次のように言う。

梁川は神を見たり。余はそを信ず。唯その実験を長く把握し得ざりしを惜む、と。『病牀録』(明41・7新潮社)中の言葉であるが、この見神の実験を通して梁川の得たのが、

われは宇宙の間に於けるわが真地位を自覚しぬ。吾は神にあらず、又大自然の一波一浪たる人にもあらず、吾れは『神の子』也。

という自覚であつたことを思えば、独歩の好意的発言も頷ける、何しろ彼が「神の子」(『太平洋』明35・12)で展開してみせた内容にそっくりなのだから。

しかも、その後梁川は、見神の実験に至るまでの宗教生活に関する論考や随想を集めた、いわば「梁川が神を訪ね求めた道程の記録」(註)とも言うべき『病間録』(明38・9金尾文淵堂)を刊行するが、所収の一篇の「驚異と宗教」で梁川は、次のように述べている。

予の幼かりしをり、路辺の磊砢たる岩石を打眺めて、屢々一種の埒なき黙想に耽りたることありしを。かゝりけるをり、われは、いつも手もて其の石を押し動かし、或は其の硬きかどくしき面に触りなどして、何心なく、半ばは衝動的に其の石の實在性を確め、さて後ちにかゝる物の無窮に天地の間に在るの不思議に撞著して、小供心の解くよしもなき不可言の驚異に充たさるを常としたりき。今より憶へば、この心これ幼稚なが



らに存在の驚異を経験せるの心なりけるなり。われに取りては物の在りてふことは、一種無限の寂寞と不安とを含める驚異の大源たりし也。(略) 存在は天地の第一事実也。しかもこの自明の第一事実は、如何ばかり予を打驚かしめ、打悩ましめたりしぞ。

これは、岡本誠夫の「驚異」思想そのものと言つても好い。齋藤弔花も言うように、正に「知己を見出した」思いの独歩は、「嬉しさの余り」、「独歩集」(明38・7近事画報社)一冊に、書簡を添えて梁川に送った。「明38・10・19付書簡」には次のようにある。「独歩集中「牛肉と馬鈴薯」と題する一篇」について、今まで「小生の意を得たる批判」に接したことがなかったが、「貴下」の「驚異と宗教」の一篇こそ「岡本誠夫を通して描いた」小生の心靈の経験と符号すると思うので、是非「一読」してほしい、と。おそらく独歩は、梁川の登場に、文壇に無視され続けた「牛肉と馬鈴薯」がようやく受け入れられる機運の到来を見たに違いない。つまりそれこそ「岡本の手帳」執筆の動機ではなかったか、少くともそう考える方がはるかに自然に思える。

第一、先に示唆したように、「牛肉と馬鈴薯」自体、時代の促しのもとに成立した節がある。この小説を掲載した大阪の文芸誌『小天地』の編集長であつた薄田泣菫に宛てた(明35・4・8付書簡)がそれを裏書きする。

『牛肉と馬鈴薯』の如きも遂に小生を満足せしむるの評に接せず候。○○君の『小天地』に於ける評の如き、殆ど該小説の皮相だけ読まれしやに小生は感じ情なく候。其他早稻田学報の如き殆ど該小説の主眼を知らざるものと存候。今やニーチェ論あり、これに伴ふ人生論あり、小生は機会を見て該小説の主眼を論文的に又一度主張して見たく存居候。其時は御高見願上候。

この文面より推せば、「牛肉と馬鈴薯」の「主眼」すなわち「驚異」思想と、ニーチェの哲学の間には、何らかの深い結縁があることになり、しかも独歩は、明治30年代半ばのニーチェ流行という事態を受けて、再度「驚異」思想について書いてみようとして企てていたことになる。

先ず、「牛肉と馬鈴薯」の「驚異」思想と「ニーチェ」との関係について見てみたい。「明治倶楽部」を舞台にした岡本誠夫の演説、畳み掛けるように語られていく彼の「驚異」願望なるものが、畢竟何を志向するのかを

見据えようとしても、なかなか焦点を絞りにくい。何しろ「不思議に驚く」筈が「不思議に痛感する」に、さらには「事実」に驚くから「事実を直視」へと、次々言い換えられていき、その対象も、「宇宙」へ「人生」へ「死」へ「我」と変っていくのであるから。しかしこの雑駁な觀念も、独歩の思想的営為に於いては、やがて「天地生存の感」なる造語に収斂していく訳で、それを念頭に置いて眺めれば、岡本の願望の最大公約数は、要するに「習慣の眼が作るところのまぼろし」を振り払い、「驚異の念を以てこの宇宙に俯仰介立したい」ということであつたと知れる。

山田博光氏は、独歩の言う「天地生存」について、それは、「日常性をはぎと」られ、

過去からも未来からも切り離されて、この宇宙に投げ出されている存在、

すなわち「実存の自覚」であると言う。そしてそれなら、正に「実存哲学の先駆者」と言われるニーチェの思想に独歩が強い関心を抱いたとしても何の不思議もない。おそらく始め漠たる願望にすぎなかつた「驚異」なる発想が、ニーチェ流行という時代の促しを受けつつ、次第に「天地生存の感」なる觀念に整えられていった、梁川風に言えば、「天地生存」という第一事実に對し無限の驚異を感じたい、ということになるうか。

そもそも、我が国に於ける「ニーチェ」の紹介は、明治26年に來日したケーベルに始まるとされるが、本格的な受容となると、明治30年代に入ってから、姉崎嘲風・吉田静致・長谷川天溪らによつてである。しかし何といつても、ニーチェを文学思想上の中心課題へと押し上げた功績は、高山樗牛と登張竹風にあるといつて好い。

明治33年8月、ニーチェの訃報が伝わるや、樗牛は、「文明批評家としての文学者」(『太陽』明34・1)を書き、ニーチェの本質を偉大なる文明批評家であり、従つて偉大なる詩人であるとし、その思想の要諦を次のようにコンパクトに紹介した。

人道の目的は衆庶平等の利福に存せずして、却つて少数なる模範的人物の産出にあり。是の如き模範的人物は則ち天才也。超人也。

続いて樗牛は、有名な「美的生活を論ず」(『太陽』明34・8)を書くことになるが、極めてセンセーショナル

な主張故に、文壇に「美的生活論争」へ「馬骨人言論争」を巻き起こしたことは改めて言うまでもあるまい。そしてその樗牛の「美的生活」論とニーチェの思想を結び付け、さらに「当時としては啓蒙的なニーチェ紹介の本格的作業」である「フリードリッヒ・ニーチェを論ず」（『帝国文学』明34・6—11）を書いたのが、登張竹風である。

さて、独歩は、ニーチェ流行の端緒となった「文明批評家としての文学者」にすぐさま反応し、「高山文学士の論文に就て」（『民声新報』明34・1）を書く。但し日本の現実を無視した高踏的な樗牛の物言いを揶揄したその内容からは、独歩がニーチェに関心を抱いているのかどうか、全く窺い知れない。しかしこの頃の独歩が、ニーチェの思想に共感を寄せていたであろうことは、僚友田山花袋の『近代の小説』（大12・2 近代文明社）（二十四）章の次のような証言を見れば明らかである。明治33年後半、いわゆる「霞ヶ丘時代」に、二人は次のような会話を交したと言う。

本当に人生に触れたものでなければ、本当の芸術はつくることはできない。さういふことを私達は常に論じた。（略）私はニーチェの価値顛倒のことをよく話した。

『ふむ——面白い』

かう深く耳を傾けるやうにしてかれは言つた。『何しろ徹底してゐるぢやないか。』私は言葉をつゞけて、『自分でやるより他に為方がない！それでいけなければ、何うでもしろ。我々人間はあまりに自惚れすぎてゐる。あまりに神になりすぎてゐる。あまりに理想から甘やかされすぎてゐる。もつと元にもどれ！原始状態に戻れ！したいことはどしどしやれ！（略）』

『賛成だ……』

さらに、ニーチェが時代のメルクマールになつてゐた明治34年夏頃、再び文筆生活に入つた独歩は、折から台頭しつつあつた「明星派」の与謝野鉄幹・晶子夫婦に接近する。鉄幹は、既成文壇人としては珍らしく樗牛の「美的生活」論に讃辞を送つた一人であるが、それは決して偶然ではなく、中村光夫の言葉を借りれば、

この新詩社（明星派）の運動と同じ風潮に棹した、というよりむしろ共通の時代風潮をつくりだした評論家

が高山樗牛、

だからである。その「明星派」と独歩は、一時かなり深い関係にあったらしく、彼は、鉄幹に次のような書簡を送っている。雑誌『明星』への寄稿に関する「明34・7・27付書簡」である。

『狂熱日記』は小生の「靈魂苦惱記」なり、小生の「恋愛懺悔記」なり。明星の号を重ねる数回を要すべきもの也。

結局、この『熱狂日記』は書かれなかったが、書簡の内容から推して、恋愛の自由と神聖を称え、大胆な官能の解放を押し進めた「明星派」への共感なしにはあり得なかった構想であることは確かである。その後独歩は、明治35年、いわゆる「鎌倉時代」に、樗牛と親しく往来している。

以上のような、ニーチェ流行を軸に旋回する明治30年代半ばの文壇と独歩の関係を眺めてみると、前掲「明35・4・8付薄田泣菫独歩書簡」の意味がはつきりしてくる。すなわち「今やニーチェ論あり」とは、おそらく登張竹風「フリードリッヒ・ニーチェを論ずーあたりを念頭に置いているのであろうし、へこれに伴ふ人生論」が樗牛「美的生活を論ず」を言っているのは間違いない。いずれにしても、「牛肉と馬鈴薯」の成立にニーチェ主義台頭という時代思潮が関与していると考えてもよさそうである。

ところで、独歩がニーチェの著作を読んだ形跡はない。彼のニーチェ受容は、あくまで樗牛や登張竹風、それに田山花袋などの理解を通してであつたと考えられる。作家としての花袋より「学者としての渠を尊敬せざる可からず」（『病牀録』明41・7新潮社）と言う独歩であつてみれば、特に花袋の影響が見逃せない。例えば既述の『近代の小説』三十章には、花袋の理解したニーチェの思想がどのようなものであつたかをコンパクトに示した文章がある。

その時代に於いて、一番強く私達の心を動かしたのは、ニーチェの箇人思想と、強者の觀念と、古い慣習の打破と、価値の顛倒とであつた。私達は何を措いても、もつと本当にならなければならぬと思つた。

と。これは、ほぼそのまま独歩の「牛肉と馬鈴薯」の要諦といつて好い。『古い慣習の打破』は言うに及ばず、

〈箇人の思想〉や〈価値の顛倒〉も、次のような点から読み取れるのではなからうか。すなわち〈明治俱樂部〉に集う面々は、一角の〈紳士〉と設定され、皆〈人力車〉を外に待たせている。ところが一人岡本のみ、人力車にも乗らず、〈真暗な中央からひょっくり現われ〉る。しかも彼は、受付に〈五号活字で岡本誠夫としてあるばかり、何の肩書もない〉名刺を差し出す人物なのである。これが痛烈な個人主義思想に基くものであることは、その後の展開で、この岡本こそ実は高潔な人物であり、一見立派な紳士が単なる俗物にすぎなかったという、要するに一種の顛倒が用意されていることでも窺える。

### (三)

次に、〈明35・4・8付薄田泣菫独歩書簡〉が示唆するもう一つの点、ニーチェ流行という時勢に促され、「牛肉と馬鈴薯」の〈主眼を論文的に又一度主張して見たく〉という企てがどうなったのか、考えてみたい。

結論的に言くと、論文的に主張したものは差当って見当らない。何らかの理由で頓挫したのであるが、但し、そういう企てでそれ自体がこの時期の独歩の創作に様々な痕跡を残していることは充分考えられる。試みに、既述の登張竹風「フリードリッヒ・ニーチェを論ず」をフィルターにしてそれらを浮び上がらせてみる。例えば竹風は、その最も核心をなす〈超人〉の〈意義解釈に關しては、蓋し三様あり〉とし、〈常種即ち人類〉に対する〈超種即ち神人〉、〈奴隸若くは混族〉に対する〈新貴族〉、〈凡人若くは畜類〉に対する〈天才〉をあげ、さらに次のように言う。

第一は全く自然の所生なり、第二は歴史的産物なり、第三に至ては全く芸術的人為若くは文明の作る所なり。つまり、このような解説を下敷にすれば、ツルゲーネフ「アンドレ・コロゾフ」の翻案小説の題名が何故「非凡人」(『小天地』明35・6)であったのか、また独歩が北海道で出会った〈宿屋の主人〉を「空知川の岸辺」(『青年界』明35・11—12)で描く際に、

彼はよく自由によく独立に、社会に住んで社会に庄せられず、無窮の天地に介立して安んずるところあり、

海をも山をも原野をも將た市街をも、我物顔に横行闊歩して少しも屈托せず、天涯地角到るところに花の香しきを嗅ぎ人情の温かきに住む、

というふうには、余自身の空想を加えて以て化成した意図は何か、よく見えてくると言いたいのであるが。そしてその最も明瞭な痕跡を、「神の子」(『太平洋』明35・12)と「悪魔」(『文芸界』明36・5)に窺うことができる。

先ず、「神の子」について考えると、非常に短い小説乍ら、(上)(下)二章構成になっている。(上)は、人は死を直視できないとする、既に「死」(『国民之友』明31・6)と題して作品化されたことのある独歩一流の死生観の骨子が、二人の青年の対話という形で展開される。また主人公の(年頃二十七・八、神經質らしい顔付をした色白の男)が友人の(髭)の男に向つて、死を直視できるかどうかについて、三度(「真実」にさう思うかね)と問い質し、三度(「自から欺むいて」)いると避難するというこの対話の構造は、おそらく『新約聖書』のマタイによる「福音書」第二十六章の有名なペテロの裏切りの場面を踏まえており、極めて技巧的であると言える。

さて、この主人公の青年は、生死の事実を直視できず、(たゞ生きて居るから生きて居る)のでは、(犬と相去る一步)であると考え。友人の(髭)氏は、正に(犬のような生)を生きているにすぎないという訳である。ならば、主人公の青年は何者なのか。そこで(下)である。(一人の翁)が登場し、生死の事実を直視しようとするこの青年に向かつて、次のように言う。

社会生存の暗室から、天地生存の事実を直視する人は、人の中の最も進んだ人で、やがてそれは神の子、である。この老人は(神)に違いないが、(神の子)たる青年に、さらに、(総を捨て、乃公に従へ)と命じ、この小説は閉じられる。

(社会生存の暗室から、天地生存の事実を直視する人)というのは、正に「牛肉と馬鈴薯」の岡本誠夫の願望の復奏である。しかしそれを、(人の中の最も進んだ人で、やがてそれは神の子)であるというように、普遍化しようとする態度は、「牛肉と馬鈴薯」に見られなかったものである。やはり、ニーチェの(超人)思想をめぐ

る、既述の登張竹風の解説などの影響を考慮しなければあり得ない発想ではなからうか。具体的には、竹風の指摘する〈超人〉の三つの解釈のうち、〈超種即ち神人〉あたりが下敷になっていると思われるが、竹風の説明にもう少し耳を傾けてみたい。

この説はダーウィンの進化論に基くものゝ如し。以為らく、動物は漸く進化して、今や最高と思惟せらるゝ人間に到達せり。然れども、今日の人間を以て最高の進化となすは誤まれり。今日の人間豈に最終の目的対境ならんや。されば吾等の道程は、今日人間の常種より超種に進むに在り。下等動物の如きは、自然の淘汰を以て進化せりといへども、吾人人間は自から意識を用ゐて向上の発達を庶幾せざるべからず。猿を養育教訓して以て人間となす如く、人間を鞭撻教育して以て超種の人間即ち超人に進化せしめざるべからずと。(略) ニイチエは今日の人間及人生に満足する能はざるが故に、更に大なる目的と人生の意義とを、彼の超人に求めたるのみ、されば超人とはニイチエによりて作られたる神なり、人類の理想なり。

と述べている訳で、独歩の「神の子」の発想との共通性は疑うべくもないであらう。

次に、「牛肉と馬鈴薯」と同工異曲の小説との評価もある「悪魔」についてである。独歩の小説としては比較的長いもので、全体が九章で構成される。布浦武雄と従妹君子の静かな山林生活に、本編の主人公でもある浅海謙輔が帰省し、牧師の尾間利雄が赴任してくるのを発端として、物語は主に、謙輔と尾間の、君子への愛と信仰をめぐる対立を軸に展開し、それが武雄の眼を通して語られていくが、謙輔の言動はどこか不可解である。ところが八章に、謙輔が武雄に托した「悪魔」と題する、全十五節の〈随筆〉が象嵌され、つまり「忘れえぬ人々」(『国民之友』明31・4)のような一種の入れ子型になっている訳だが、これによって、これまでの謙輔の内面が明かされる仕組みになっている。要するに彼こそ「真実の伝導者」であつたと。

始めに問題にしたいのは、謙輔の信仰に対する考え方である。坂本浩氏の要約を借りると次のようである。<sup>13)</sup>

先ず気づくことは、形式化し伝習化し、いっしか生命を失った宗教に対する謙輔の忌憚なき批判である。(略) 普通の所謂信者は未だ謙輔の苦悶に至らずして、安心立命の境地を得ていると妄想している。それをも神を信

ずるものと言いうべくんば、自分は悪魔と呼ばれることを名譽と考える。このような伝道は人をあやまらせる憎むべき虚偽だと謙輔は説くのである。『神を説くは易し。神を求めずんば止む能はざる境に人心を導くことは難し』。これを実行しないでどこに伝道があるか。むしろ『我は安くして犬の如く死なんより悶きて天界を失落せる悪魔の子の如く生くべし』と謙輔は叫ぶ。

『悪魔』というような発想はともかく、この謙輔の思想の骨格は、既述の、明治30年代後半の『精神運動昂揚期』の思潮、特に、腐敗墮落の極まった『真宗』の改革を目差し、雑誌『精神界』を主宰した清沢瀧之の主張に直ちに繋がることを指摘しておきたい。

また、『悪魔』を全体として見れば、『神の子』と同様、『天地生存の感』を主題化していると言えるが、題名の対照性からも想像できるように、二つの小説には相応の差異が見られる。例えば山田博光氏は、これを『推移』と見做し、『神の子から悪魔の子へと』独歩の思想が転換したのだと言い、さらに『神の子』が『信仰の人』であるのに対し、『悪魔の子』は『煩悶の人』、すなわち『神と悪魔、信仰とニヒリズムの谷間にあつて、苦悶の中にたたずむ人』であるとしている。

しかし、山田氏のような理解では、題名の対照性と必ずしも見合わないばかりか、『煩悶の人』が何故『悪魔の子』なのか納得できない。『悪魔』の意味を再検討してみる必要がある。田山花袋は、自伝小説『妻』(『日本新聞』明41・10—42・2)に、『ニイチェの学説』や『美的生活』ということが流行した当時のことを詳しく書き留めている。例えば『二十七』章からいくつか拾ってみると、次の如くである。

胸には美しい清い思想を抱いて居ると思ひながら、實際は無情、臆病、陋劣な挙動をのみして居た。虚偽の生活をまことの生活と信じて居た。

善とは人間が社会組織上の便利と見たる時の符徴、悪とは人間が社会組織上に不便と見たる時の符徴——。真実なれ、自然なれ、われまこと獣たれば、獣たるに甘んぜん。まことに悪魔たれば、悪魔たるに甘んぜん。弱点あれば弱点を人に示すに躊躇せじ。願ふところは、唯わがまことの心、まことの姿、まことの力の偽ると



ころなく頭はれんことのみ——。

花袋は、樗牛や竹風らによつて、ニーチェの思想が喧伝された情況と、その影響の質について語っている訳だが、要するに、真実を直視できれば悪魔たることも恐れじと、正に「悪魔」の浅海謙輔と同じ主張をしている。おそらく影響関係があるだろうが、いずれにしろ独歩の「悪魔」なる発想が、「神の子」と同様、やはりニーチェの思想の何らかの反映だったとすると、山田氏の言う思想的転換など両者の間に想定できる筈がないことになる。ならば、「神の子」と「悪魔」の違いは何か。同じように〈天地生存の感〉を求め乍ら、何故一方が〈神の子〉で他方は〈悪魔の子〉なのか、ということであるが。

既述のように、「牛肉と馬鈴薯」について、独歩の自己凝視の結果、〈求道者〉岡本と〈認識者〉近藤という二つの分身が生み出されたと指摘したが、要するに「神の子」と「悪魔」の違いも同じではなからうか。つまり独歩は、ニーチェ主義台頭という時勢に促され、「牛肉と馬鈴薯」の主眼を論文的に書いてみようとしてた。論文そのものは霧散したものの、副産物のように「神の子」「悪魔」という双子の小説が構想されたのだとすると、〈求道者〉岡本と〈認識者〉近藤の、それぞれ発展として〈神の子〉と〈悪魔の子〉が発想されているとしても何の不思議もあるまい。

#### (四)

また、幻の論文「牛肉と馬鈴薯」の断片という想定に立てば、それは、「神の子」や「悪魔」のみに止まるまい。少くとも、もう一つ〈岡本もの〉の流れを汲む「画の悲み」(『青年界』明35・9)が考えられる。

「画の悲み」は、独歩の少年期の〈回想〉である点、しかも極めてリアルな少年像を示している点、それ以前に書かれた独歩の〈少年もの〉とは明らかに異なる画期的な小説であると考えられる。この小説には、原型となつた小品「画」(明26・4・12)が存在し、桑原伸一氏のように、その過程を単純な〈改作〉と見做す説がある。<sup>2)</sup> そうだとすると、「画の悲み」に見られる既述の特徴は、実は、小品「画」の特徴であつたということになりかね

ない。しかし小品「画」は、制作・鑑賞両面から、自分の体験を交えつつ、全体としては一つの芸術論に近いものと考えられ、少くとも体験の子供像それ自体を主題化したものではない。要するに独歩は、「画の悲み」に於いて、小品「画」を少年期の回想に読み替えていると考えてほぼ間違いない。「画の悲み」の画期的な意義は動かない。

さて、そこで、この小説の構造であるが、次のようなものである。〈語り手〉の岡本なる人物が少年時代を回想することに始まり、絵の天分をめぐって敵視し続けた級友の志村と、自然を媒介に無二の友になった経緯が語られ、そして今や、その志村も早世し、自然は、人生の暗愁に閉ざされた自分の心を癒してくれなくなったという述懐に終る、と。つまり独歩お得意の枠小説になっている訳だが、枠づけられる少年期の物語が、基本的には小品「画」の読み替えにすぎないとならば、むしろ枠の方にこそ、この小説執筆の重要な意図が潜んでいることになる。先ず、前〈枠〉を見てみたい。

画を好かぬ小供は先づ少ないとして其中にも自分は小供の時、何よりも画が好きであつた。（と岡本某が語り出した）。

このようなプロローグは、独歩の小説には珍らしくない。例えば「少年の悲哀」（『小天地』明35・8）は、〈（と一人の男が話した）〉とあり、「女難」（『文芸界』明36・12）も、〈（と或男が話した）〉とある。しかし一見して明らかのように、それらは匿名になつてゐる訳で、「画の悲み」のみ、〈岡本某〉と明示してある。しかも枠づけられた少年期の物語の中で、〈岡本〉の名が登場するのは一箇所のみで、後はすべて一人称の〈自分〉で統一されている。その唯一の例外にしても、むしろ〈自分〉である方が適切であり、要するに前〈枠〉で、わざわざ〈岡本某〉と名前を明示する必然性が全くない。「少年の悲哀」や「女難」のように、匿名の方が整合性の上からむしろよかつた筈である。翻つて見れば、〈岡本〉の名前の明示は小説の方法上の問題とは別の意味に於いて生じたことになる。それは何かということだが、後〈枠〉を見てみたい。〈岡本某〉の現在の姿が次のように描かれている。

自分はたゞ幾歳かの年を増したばかりでなく、幸か不幸か、人生の問題になやまされ、生死の問題に深入りし、等しく自然に対しても以前の心には全く趣を変へて居たのである。言ひ難き暗愁は暫時も自分を安めない。この〈岡本某〉の姿が「牛肉と馬鈴薯」や「岡本の手帳」の〈岡本誠夫〉のものであること、もはや多言を弄すまでもあるまい。〈岡本某〉の言う〈人生〉や〈生死〉が、正に岡本誠夫の冀う〈驚異〉の対象であることを指摘すれば充分であろう。つまり独歩は、小品「画」を自身の少年期の回想に読み替え、それをさらに、彼の分身的人物たる〈岡本誠夫〉の人間像にある程度無理矢理嵌め込んだのではあるまいか。その証拠に、岩崎文氏も言うように、梓になる物語が描き出す苦悩する〈岡本某〉の像と、梓づけられる少年期の物語がうまく噛み合っていない。この二つの物語が内的にどのような繋がるのかはつきりしないのである。

既述のように、独歩は、青年時代の心境表白である「わが願ふ所」を、綱島梁川の思想の促しを受けて、ほぼそのまま「岡本の手帳」という装いを凝らして発表した訳だが、見てきた通り、「画の悲み」もまた、同じ発想と方法で成り立っている。しかも独歩の分身たる〈岡本誠夫〉の造型に胚胎した自伝的要素をさらに発展させている点、極めて写實的な少年像を示す点、総じて、後の自然主義文学に共通する要素が認められる点にこの小説の特徴があることを思うと、やはり〈明35・4・8付薄田泣菫宛独歩書簡〉が示唆する、ニーチェ流行という時代思潮に促され、「牛肉と馬鈴薯」の〈主眼を論文的に又一度主張して見たく〉という企てを推し進める中で生み出されたものの一つと考えて好い筈である。と言うのも、瀬沼茂樹氏がつとに指摘しているように、明治30年代の文壇でニーチェ主義がへまつたく反対の二様の方向に解釈され、一方では〈ノイエ・ロマンティックの勃興〉を齎らし、他方では〈自然主義への軌道〉を敷いたからである。

ところで、「画の悲み」に於ける、梓になる物語と梓づけられる物語の齟齬についてであるが、これまで述べてきた文脈に添って考えれば、要するに問題は、〈岡本某〉の現在が何故〈言ひ難き暗愁〉に閉ざされているのかはつきりしないことにある。しかし「牛肉と馬鈴薯」でもやはり、岡本誠夫は〈言う可からざる苦痛の色〉に包まれ、しかもその由縁が、いわば主題化されている。すなわち恋人の死と共に〈山林生活〉の理想が潰えた体

験や、〈習慣の眼〉に羈束され〈天地生存〉の事実を直視できないという思いであるが、つまりそれらを〈岡本某〉の現在に重ねて読むことで、少年期の回想との繋がりが浮かび上がってくる筈である。取り敢えず岡本の少年時代の体験を擦ってみよう。

腕白でも数学でも全校第一の岡本であったが、天性好きな画では志村に勝てない。教師や生徒がこぞって大い志村に肩入れするので、自然彼は、岡本の〈競争者〉になった。全校が注目する展覧会の日、志村の出品した〈コロンブスの肖像〉のチョーク画に、岡本の平凡な〈馬の絵〉が完全にくすんでしまい、彼は悔しさに泣く。さつそくチョークを買い揃えたある日、野外に写生に出かけた岡本の前に、一心に水車を描く志村の姿があった。彼は、そういう志村を画題にして描いているうち、次第に蟬りが解けていく。以来二人は〈又無き朋友〉となり、よく連れ立って野外を写生するようになった。

繰り返せば、岡本は、初期の独歩の小説に描かれる浪漫的子供像と異なり、嫉妬・憎悪・劣等感や優越感などに悩まされる少年として、写實的に造型されている訳で、いわばこれは、そのような世俗的感情の浄化の物語とも言えよう。そしてその場合、注目されるのが、陋劣な感情に支配されるのが〈学校〉という正に〈社会の縮図〉たる場なら、それから解放されるのが〈自然〉の中、という対照的な構造である。これが恣意的な設定ならば、つまりこの少年期の回想部分は、次のように粹づけられていると考えられる。仮令子供といえども、社会生活を強いられる以上、現実原則に縛られざるを得ないが、自然の懷に抱かれれば容易に〈天地〉間に自己の生を托すことができた、と。エピソードに示唆される〈岡本某〉の現在、すなわち苦悩する岡本誠夫のそれと、相対的な関係にあることは見易いであろう。そしてこのような少年期の姿は、おそらく彼の脳裏に映し出された、ある意味で図像とも考えられよう。

##### (五)

以上、詳しく述べてきたように、独歩の中期(第二期)の創作活動に於いて、石川啄木『時代閉塞の現状』の

指摘する、日清戦後の自己省察と個我の拡大という時代思潮に対応する形で、〈私〉というテーマが再浮上し、一群の小説が紡ぎ出されていく訳だが、しかもその結果、始めて、「窮死」〔文芸倶楽部〕明40・6）や「竹の木戸」〔中央公論〕明41・1）の〈小民〉像、いわば作者との紐帯を持つ〈小民〉が描かれるに到ったことは、既に論じたところである。

また、このような自己凝視を通じて、もともと求道者として出発した独歩が、自身の認識者たる反面に自覚的になっていくことも、伊藤整の指摘を待つまでもなく、見てきた通りであるが。ところで、求道者の無視し排除してきた〈自他の人間性の中にある崩壊的な、または頹廃的な傾向〉を明るみに引き出す点に認識者の認識者たる由縁があるとすれば、独歩の認識者たる自覚が深まるこの時期、冷酷な性格を持ち乍らなまじ正直そうな容貌故に罪を重ねてきた〈私〉の告白といった先行表示に始まり、〈正直者の仕事の一つがこれです。いづれ其中、外のもお話しいたしませう。〉と重い余韻を残して終る「正直者」〔新著文芸〕明36・10）のような小説が執筆されるのは、決して偶然ではない筈である。

ちなみに、その告白のあらましは次のようなものである。先ず、肉欲の満足のみ求め家庭生活には冷淡であった中学教師の父の死後、他家に養われた私の生立ちが語られ、続いて小学校教師となった私が、慎ましく下宿屋を営む母娘の好意をも省みず、父譲りの肉欲に任せ娘を弄んだ場句、校長を唆し平然と娘を捨ててしまった行為の一部始終が展開され、結局、下宿屋には〈「かしや」の札〉が掛かったという〈後日譚〉で締め括られる、と。

従来、この「正直者」について、島崎藤村が〈そこにひろげられた強い煩惱の世界と、大胆な握力、自由な筆致について感謝し、田山花袋も〈明治文学に於て最初に性慾を描いたものと称賛している〉せいか、自然主義文学との係わりにアクセントを置いて評価する傾向が強かったが、むしろ他人を不幸にしても平然としていられる非人間的人物の造型にこそ独歩の関心があったことは、一見して明らかである。要するに滝藤満義氏も言うように、〈「残忍、冷刻」な加害者〉としての自己を主題化した点に重要な意義が認められる訳で、やはり認識者たる自己の発見が、このような自己認識を促したとみて差し支えあるまい。あるいは、エドガー・アラン・ポー

の『ウィリアム・ウィルソン』(一八三九)やステイーヴンソンの『ジキル博士とハイド氏』(一八八六)の例を持ち出すまでもなく、我がうちに潜むもう一人の我を剔扶してみせずにはおかぬロマン主義的精神を見ることも可能であろう。

いずれにしろ、このような小説の構想が、正に人の心の奥に潜む非人間的・反社会的な傾向に対する認識に端を発するものであることは、やがて独歩の文学的課題であつた『小民』とは別個の、『残忍・冷刻』な『他者』を紡ぎ出すことでも確かめられる筈である。いわばそれは、もう一つの『小民史』と言つてもよい流れを構成する。

先ず、『田舎教師』の総題のもとに創作された一篇、『帽子』(『新古文林』明39・3)である。この小説は、田舎の乗合馬車を舞台に、ふきとばされた帽子を懸命に届けてくれた農夫の好意を踏躰り、ほしけりやくれてやると言い放つ傲慢な商人が、馬車を降りた時そこにいる筈のない農夫が帽子を差し出すのを見て気絶するという事件が展開される『前半』と、馬車に乗り合わせた教師が、へ人の心に潜む残忍、冷刻』と『尚ほ或物』を感じ、その商人の身の上を探るうち、彼が時々気が変になることや、養女を可愛がる反面、荒々しい気性故妻を虐待して不義に走らせた事実、あるいは釣好きであることなどを突き止める『後半』とで構成される。独歩は、『予が作品と事実』(『病牀録』明41・7)で、一篇成立の経緯を次のように語っている。

帽子の主人公は一夜余の夢を襲ひ、夢さめて後、余をして戦慄せしめた人物で其夢中の事實は心理状態として余に多大の興味を持たしめたのである。(略)余は数ヶ月の間、此夢を忘るゝ事が出来ず、考へ考へた果てが遂に此一篇に成つたのだ。

独歩が何故この夢にこだわつたのかは、小説中で、独歩の分身のような青年教師がへ人の心に潜む残忍、冷刻』に思いを馳せていることでも明らかであり、やはり独歩の人間性認識が深まる中で生み出された小説と考えて差し支えない筈だが、ところが昭和30年代頃まで、それ程評価が高くなかつた。

例えば、定評のある中島健蔵『国木田独歩論』は、『底の浅い』作で、独歩は人間性を深く凝視できなかった

と、否定的評価を下し、一応「人間性への洞察はようやく深さと鋭さを加えている」ことを認める猪野謙二氏にしても、結局は「ユーモラスな軽妙な筆にとらえられた」と見ている訳で、高く評価しているとは思えない。中で一番正鵠を射た見解を示す吉田精一氏ですら、「へばりの深い筆致で、ある特殊な人間性をぐいとい気にほり下げた」と述べている。繰り返すまでもなく独歩が見据えようとしているのは、決して「特殊な人間性」などではなく、人間性一般の奥底に潜む「残忍、冷刻」な傾向である。しかしその点が確認されるのは、昭和40年代になってからといえよう。坂本浩氏は、次のように言っている。

人の心に潜む残忍性がある程度までえぐられ、更にその奥にひそむ神秘性まで究められようとしている。と。そしてその後、「帽子」論の主要な課題は、このような残忍な人間性に対する着眼が何に由来するのかに移っていくと言えるが、独歩の内発的契機を何らかの意味で想定する説の多い中、平岡敏夫氏は日露戦後という時代状況との係わりを重視する。永井荷風や谷崎潤一郎の文字を持ち出すまでもなく、日露戦後、このような人間認識が割合一般化することを想えば、平岡説も決して無視できない。しかしまた、既述のように、「帽子」以前に同じタイプの人間を主題化した「正直者」が描かれている訳で、その事実を見過ごすことはできない。やはり基本的には、「正直者」に結実した非人間的で反社会的な「自己」認識が、やがてそういう「他者」の造型を促したと考えた方がはるかに自然であろう。

また、先にもう一つの「小民史」という系譜を提起しておいたが、この「帽子」の「商人」のような人間像は、滝藤氏もつとに指摘するように、「竹の木戸」(『中央公論』明41・1)の「磯吉」なる植木職人に受け継がれている。この小説は、極めて象徴的な「竹の木戸」を挟んで向い合う対照的な家族、すなわち女中を含め六人構成の幸福な都市サラリーマン家族と、貧困を窮める植木屋夫婦との間に進行する一つの悲劇を描いたものであるが、要するに、

両者の間に竹の木戸が開くことによって一つのドラマの幕があき、この木戸が閉じられることによって幕が引かれる。この間にお源という一人の女の存在が消えてゆく。

といった構図になっている。<sup>(96)</sup>それ故「竹の木戸」論の問題は、〈お源〉の自殺をめぐる展開していくことになる。

一方で、お源の自殺を〈不自然〉と極め付ける夏目漱石「独歩氏の作に低徊趣味あり」(『新潮』明41・7)の呪縛があるため、例えば山田博光氏のように、肺結核がかなり進行していたこの頃の独歩であつてみれば、お源を描き切ることは体力的に不可能であつたとする意見もあるが、<sup>(97)</sup>概ね、お源の自殺を認め、従つてその原因追求に関心が集まつていえると言える。しかもその原因に関して、坂本浩氏のように、同じ階層出身故ライバル関係にある大庭家の女中へお徳に対する女の意地〉を指摘する意見もあるものの、夫〈磯吉〉との関係性に於いて解釈を進める方向ではぼろち着いてきていると言つて好い。単純に〈夫への幻滅〉を言う長谷川泉氏から、〈夫以外に頼るものがない孤独な存在〉という点にアクセントを置いて捉える滝藤満義氏、さらに一步進めて人間の深奥に潜む〈存在の不安〉を見る平岡敏夫氏まで、<sup>(98)</sup>しかし結局は、夫に対する人間的絆の喪失を見ていることに変わりはない。

ならば、お源縊死の真相究明にとつて、磯吉の人間性への理解は必須である筈だが、実際、その重要性に自覚的なのは、わずかに滝藤論文ぐらいのものである。滝藤氏は、〈無感動へぐうたら〉な人物という片岡懋氏の指摘を受けつつ、さらに小説中に点綴される磯吉をめぐる記述、〈所謂「解らん男」〉という世評や、結末の、

それから二月経過と磯吉はお源と同年輩の女を女房に持つて、渋谷村に住んでいたが、矢張豚小屋同然の住宅であつた。

という〈後日譚〉から、〈怠惰へ動物的な生〉などのイメージに加えて、〈何を考えているのかわけのわからない〉〈おおよそ人間的な情感の欠落している男〉という磯吉の人間像を導き出してみせる。そしてそれを、既述のように〈残忍、冷刻〉な〈他者〉の系譜に繋いでみせる訳だが、つまり磯吉の正体が、このような非人間的なものだという事実を念頭に置けば、夫の人間性への幻想によつてかろうじて支えられていたにすぎない孤独なお源の存在など、実に危いものでしかないことが納得される筈である。



ところで、お源縊死の真相をこのように捉えてみると、以前別稿で指摘したこの「竹の木戸」と処女作「源おぢ」(『文芸倶楽部』明30・8)との対応関係が、より明瞭になってくる。<sup>9)</sup>すなわち「源おぢ」も、全く孤独な存在である源が、彼の人生の最後の望みを托した紀州乞食への人間的信頼を断ち切れ、縊死する物語であり、従って、源と紀州の関係が、ある程度そのままお源と磯吉のそれに受け継がれていると考えられる点である。

言い換えれば、「源叔父」と「お源」、共に「小民」の原像を思わせる「源」と命名されていることが決して偶然ではなく、結局は作者の傀儡にすぎない「源叔父」から、「他者」として物語世界に自立する「お源」へという発展を想定すれば、晩年の独歩が、処女作で見据えた「源」に再度挑戦している構図が浮かんでくる筈だが、さらに「紀州乞食」と「磯吉」の関係まで、同様の構図のもとに収斂され得るとあらば、もはや二つの小説の対応関係を疑う訳にはいくまい、と言うことである。

既述のように、「竹の木戸」の磯吉は「解らん男」と評判されるが、「誰一人開ける事叶はぬ箱」である「源おぢ」の紀州乞食も、要するに「何を考えているのかわけがわからない」存在であることは、「ただ動き、ただ歩み、ただ食ふ」だけで、源叔父の自死に対し何の関心も示さなかったという、正に喜怒哀楽の感情を喪失した彼の人物像が、「磯吉の、〈怠惰〉で〈動物的な生〉を貪り、やはり妻の縊死にも無関心な〈人間的情感の欠落〉した人物という設定に、直ちに結び付くことでも窺える筈である。にも拘らず、〈彼はいつしか無人の島に其の淋しき巢を移し此処に其心を葬りたり〉と、いわば人間的解釈を放棄されてしまった紀州乞食とは対照的に、磯吉の存在は、人間の心の奥に潜む〈残忍、冷刻〉な傾向の顕現として理解されているのである。つまりは、〈求道者〉たる青年独歩の識閥を逸脱してしまっている紀州乞食の如き人間性を、〈認識者〉に変貌した晩年の独歩が、正に人間性の問題として問い返した時、非人間的で反社会的な磯吉の人間像が浮かび上がったのではなからうか。

さて、このもう一つの「小民史」のその後の展開を穿鑿する自由は、我々には許されていない。しかし晩年の独歩が「小民」の理解の幅を広げていたことは、先ず確実に言える。例えばオムニバス形式の小説「渚」(『文章

世界「明40・12」中の一編「里芋」である。男共に弄ばれ、誰のとも知れぬ子を孕み乍ら、それでも平然として  
いる「お菊」のようなアモラルな「小民」像は、以前の独歩の眼には決して映ることのなかったものであろう。

## 〔注〕

- (1) 拙稿「小民史」の行方・へ社会」への眼差——独歩文学を貫くもの——」、『国学院雑誌』平3・1)
- (2) 北野昭彦「湖処子の『帰省』と独歩の『帰去来』」、『園田女子大論文集』昭53・10)
- (3) 森英一「国木田独歩『帰去来』考」、『金沢大学教養部紀要』昭55・1)
- (4) 滝藤満義『国木田独歩論』(昭61・5 堀書房)
- (5) 青年時代の独歩の分身である峯雄の認識を、現在の独歩が訂正するという構造は、初期の独歩の小説に共通して見られる。「源おち」忘れえぬ人々「河霧」春の鳥」など。注(1)の論文を参照されたい。
- (6) 拙稿「郊外」像の発見にそつて」、『文学』昭61・8)を参照されたい。また、中沢臨川・生田長江『近代思想十六講』(昭8・9 新潮社)で、ニーチェについて次のように述べている。「斯くの如く彼は戦を謳歌する。戦へ、戦へ。戦のみがよく人間に進歩を齎す。戦のみがよく我等を超人にまで高める」と。「體ヶ丘時代」の独歩はニーチェに共感しており、「帰去来」の「戦闘」に、あるいはニーチェの影響があるのかも知れない。
- (7) 山田博光『国木田独歩論考』(昭53・9 創世記)
- (8) 伊藤整「求道者と認識者」(『新潮』昭35・9)
- (9) 注(4)に同じ。以下同書からの引用は注記しない。
- (10) 石田広康「梁川の思想」(『虫明』・行安茂編『網島梁川の生涯と思想』昭56・4 早稲田大学出版部)
- (11) 齋藤弔花『国木田独歩と其周囲』(昭18・3 小学館)
- (12) 注(7)に同じ。小泉浩一郎「欺かざるの記」私論——実存的生命感の追求を中心に——」、『東洋研究』昭48・2)も、同様に捉えている。
- (13) 栗田賢三・古在由重編『岩波哲学小辞典』(昭54・11 岩波書店)
- (14) ニーチェの紹介については、主に次のような論文を参照にした。吉田精一「自然主義の研究」(上)(昭30・11 東京堂出版)。「長谷川泉」登張竹風」(『明治文学全集』40、昭45・7 筑摩書房)。松田稷編『比較文学辞典』(昭53・1 東京堂出版)。
- (15) 中村光夫『明治文学史』(昭38・8 筑摩書房)

(16) 「牛肉と馬鈴薯」について、従来カーライルの、特に『英雄崇拜論』の影響を言う論が多いが、登張竹風「フリードリッヒ・ニーチェを論ず」は、ヘーネイチェの天才論は、カーライルのそれと相似てゐる点を指摘している。  
(17) 中沢臨川・生田長江『近代思想十六講』にも同様の指摘あり。おそらく最もニーチェに親しんだと言われる長江の文であろうが。

(18) 坂本浩『国木田独歩』(昭44・6有精堂)

(19) 明治30年代の個我の拡大という思潮を担つたものとして、高山樗牛と綱島梁川をあげる論は、石川啄木『時代閉塞の現状』をはじめ多い。例えば阿部能成「高山樗牛と綱島梁川」『新人』大2・11。しかし清沢満之の果たした役割も決して無視できない。島崎藤村『家』奥書(昭12・10)は次のように言う。「明治三十年代が新しく進まうとするものに取つての準備の時であつたヘーネイチェの哲学から日蓮の宗教にまで帰つて行つた高山樗牛君が活動もその期間に於いてであつた。仏教の再生を期した清沢満之氏等の仕事、綱島梁川君の新しい精神主義——かう数へて来ると新時代への準備はそこにもこゝにも始まつてゐたと言つていい。」と。

(20) 注(7)に同じ。

(21) 桑原伸一『国木田独歩——山口時代の研究——』(昭47・5笠間書院)

(22) 北河里香「『画の悲み』について」(筑波大学比較文化学類・日本文学演習V、平2・9・6)の指摘。

(23) 岩崎文人「二画の悲み」の構造——語り手はなぜ「岡本」か——『文教国文学』昭59・9

(24) 瀬沼茂樹「東西ニイチェ論議」(『江古田文学』昭36・11)

(25) 学校が「社会の縮図」で、学校を離れることで子供の本性に基く世界が展開されるという構造は、谷崎潤一郎「少年」(『スバル』明44・6)にも見られる。

(26) 注(1)に同じ。

(27) 注(8)に同じ。

(28) 注(18)に同じ。

(29) 中島健蔵『国木田独歩論』(『現代日本文学全集』57、昭31・6筑摩書房)

(30) 猪野謙二『国木田独歩入門』(『日本現代文学全集』18、昭37・3講談社)

(31) 古田精一『自然主義の研究』(下)(昭33・1東京堂出版)

(32) 注(18)に同じ。

(33) 桑原伸一・前掲書は、独歩の過去の体験を指摘し、滝藤満義・前掲書は、自己凝視を言う。北野昭彦『国木田独歩の文学』(昭49・9桜楓社)は、世俗への反逆精神から生まれたとするが、従えない。但し「正直者」と同じ系列の

小説と見做している点は重要である。

(34) 平岡敏夫『短篇国木田独歩』(昭58・5新典社)

(35) 「正直者」や「帽子」のような人間性認識が、いかに谷崎潤一郎の文学のそれと繋がるかを示す例として、「懺悔話」(『大阪朝日新聞』大4・1)の次のような一節がある。〈諸君は独歩の『正直者』と云ふ短篇を読んだ事があるだろう。我輩は独歩と云ふ男をあまり好かんが、あの『正直者』はちよいと好く出来て居る。木村君の正直と云ふ奴も要するにあの『正直者』の類系に属すべきものだと思ふね〉。

(36) 滝藤満義「竹の木戸」(『三好行雄編『近代小説の読み方』(2)』昭54・9有斐閣)

(37) 山田博光「竹の木戸」(『解釈と鑑賞』昭57・7)

(38) 坂本浩「独歩文学の位相」(『成城国文論集』昭43・11)

(39) 長谷川泉「竹の木戸」(『解釈と鑑賞』昭32・2)

(40) 注(34)に同じ。

(41) 片岡懋「国木田独歩と自然主義」(『国語科通信』昭43・5)

(42) 注(1)に同じ。

〔付記〕 本稿は、平成4年度筑波大学学内プロジェクト助成研究(B)「明治二十年代から三十年代にかけての埋没した作品に光を当てることによる文学史の再構築」の成果の一部をまとめたものである。